

それぞれの愛のカタチ―夏海―

ク
ア
ト
□

■作品概要

△サークル▽

癒し庵もち猫（シナリオ／効果音／音声編集…クアトロ）

△ジャンル／年齢指定▽

バイノーラル音声作品／全年齢

△作品ボリューム▽

90m 台詞文字数11,211文字

△舞台▽

現代／聴き手の部屋（夏海とは同棲中）

■登場人物

△ヒロイン▽

名前 ……夏海（ナツミ／20歳）褐色銀髪

人物 ……気だるげでクール／聴き手の後輩で彼女

兄妹に兄がいるせか聴き手の事を年上だとは意識しておらずよく毒を吐く

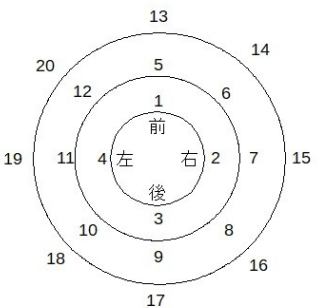
名前が情熱的なのに対して性格が大人しいことを気にしている

風呂上りなど平気で下着姿でいる様な性格

趣味／特技…ランニング／カフェ巡り／大食い

△聴き手▽

彼氏 ……大学生（22歳）／夏海にべったり／匂いフェチ／内定済み



△台詞位置の指定図▽

図はマイクとの距離を示しています
1～4は30cm
5～12は50cm
13～20は1mを想定しています
距離が取れない場合、
こちらの音量調整等に対応します

1…夏海の帰宅（聴き手の部屋／昼）

（ドアを開閉する音）

（夏海の足音）

（位置15／有声音）

ただいま。

（冷蔵庫を開けてペットボトルを開ける音）

（水を飲む演技） んっ…、んっ…、んっ…。

ふう…。

今日？

（夏海の足音）

（位置15から5へ移動しながら／有声音）

今日はいつものコース。

（位置5／有声音）

あたしの速度で走って、ちやうど一時間くらい。

ねえ先輩、そこに居られると…、邪魔。

は？

匂い…？

嗅がせろ…？

先輩、それ、本気？

あたしがランニングから帰る度にそう言ってるけど、正直キモい。

え？

何？

うん…、うん…。

確かに…、恋人の匂いっていうのは好き…。

でもそれとこれとは別。

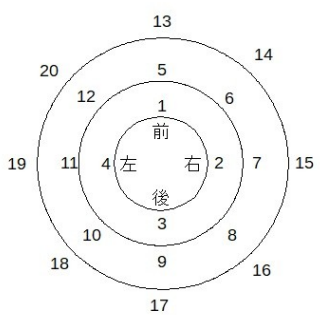
汗臭いのを嗅ぎたいって言うのは…、流石に引く…。

だからどいて。

（夏海の足音）

（位置2／有声音）

ちよっと…、塞がないで。



もう…。

(夏海の足音)

(位置 5 / 有声音)

どいてくれないと、シャワーが浴びれない。
いい加減にしないと、あたしだって怒る。

(聴き手の足音)

(位置 1 / 有声音)

ふう…、やっと汗を流せる。

(夏海が服を脱ぐ音)

あ…、脱いだランニングウェア、洗濯機に入れておくけど、その匂いも嗅いだら駄目。
とぼけても無駄。

変態の先輩が考えてる事はお見通し。

分かった？

分かったら返事して。

うん、約束。

(夏海の足音)

(風呂のドアを開ける音)

(位置 5 / 有声音)

約束…、破ったら許さない。
いい？

うん。

(風呂のドアを閉める音)

(しばらくシャワーの音)

(聴き手の足音)

(雑誌をめくる音)

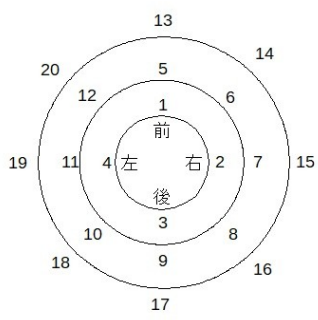
(シャワーをとめる音)

(夏海が風呂から出てくる音)

(夏海の足音)

(位置 5 / 有声音)

やつぱり。



(夏海の足音)

(位置／有声音／小声)

え？着替える？

いいの。

少しこの格好で涼みたい。

バスタオル一枚。

ほら、めくったら見える。

チラッ。

ねえ、何でそんな白けた目なの。

彼女の際どい所が見えそうなんだよ。

ほら。

まあ見慣れてるから興奮しないか。

ところで、何読んでるの？

ああこれ、あたしがこの前買った、カフェ特集の雑誌。

これ、買ってよかった。

知らないお店、いっぱい載ってた。

ほら、このお店も。

ここ、家(うち)から結構近い。

そう。

あの大通り。

何かね、すごく美人の店員さんがいるんだって。

スタイルがよくて、コーヒーも上手に淹れてくれるらしい。

その店員さん目当てで通ってる、ってお客さんもいるくらい人気。

あ、今、その店員さんを見てみたい…、って思ったでしょ。

その顔は嘘の顔。

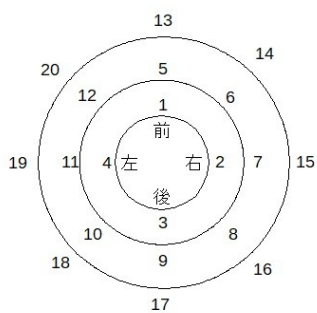
もう一緒に暮らして一年経つんだから、顔を見れば分かる。

ほんと先輩って、直ぐ顔に出るよね。

ふむ…、まあいいや。

でね、そこのお店、マスターさんもすごく有名ならしい。

世界中から厳選したコーヒー豆を扱ってて、テレビでも紹介されたみたい。



ね、今度さ、行ってみよう？

だから、美人店員さんじゃなくて、コーヒーがメインなの。

もしその店員さんに惚れちゃったら、先輩の事、嫌いになるかも。

そう？

そっか。

あたしが好き…、か…。

嬉しいな。

あたしみたいなのと付き合ってくれるなんて、最初は冗談かと思った。

そう。

告白された時、罰ゲームか何かやらされてるのかなって考えたもん。

でも、話を聞いている内に、本気だって分かった。

一生懸命、あたしのいい所を言ってくれて、どこが好きか必死に語ってくれた。

だからね、そんなにもあたしの事を好きって言ってくれる先輩が、あたしも好き。

ううん、大好き。

何？

うん、もつとそっちに行くね？

あ、そっだ。

もう匂い嗅いでもいいよ？

汗は流したし、ボディソープの匂いがするはず。

それじゃ意味がない？

何で？

汗の匂いが好き？

先輩、やっぱりキモい。

え？

うん…、匂い…フェチ…？

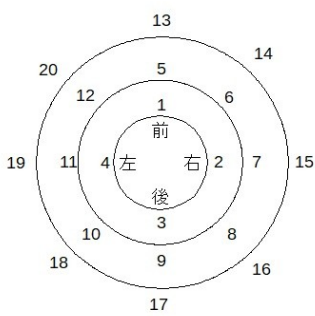
それって要するに、汗の匂いで興奮するって意味でしょ？

やっぱり変態じゃん。

さっきも言ったけど、確かに好きな人の匂いは興奮する。

けど、汗の匂いってのはちょっと抵抗ある。

うん、引く。



そんな残念そうな顔しても駄目。
あたしは嫌な事は嫌って言う。

でもその逆はまた別。

先輩はあたしの言う事はちゃんと聞いて。
ずるくない。

聞いてくれなきゃだ。

聞いてくれるよね？

よし、言質とった。

じゃあ先輩、匂い嗅がせて。

は？じゃなくて。

匂い、嗅いでもいいよね。

言う事、聞いてくれるんでしょ。

ほら、こっち来て。

あたしの胸に来て。

(夏海に抱き着く音)

(位置 1 / 有声音 / 小声)

ぎゅー…。

先輩、今なら匂い、嗅ぎ放題。

いいじゃん。

ボディソープもいい香りするでしょ。

それに、バスタオルも洗いたての匂いだし。

あ、こら、先輩。

そんなに顔を押し付けしないで。

バスタオルが落ちる。

(位置 5 / 有声音 / 小声)

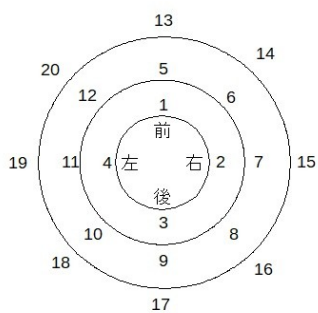
もう…、危なかった。

確かに来てって言ったのはあたしだけど。

そんなにされると思ってたなかったし。

何だかんだ言って、この匂いでも興奮するんじゃない。

ふふっ♪



先輩、面白いね♪

(位置9／有声音／小声)

んー、こういう場合、可愛いつて言うのが正しいのかな。

よく分かんないけど、要するに、先輩が好きって事。

そう。

こういう何気ない会話とかも、好き。

え？

それにしては棘がある？

そう？

(位置5／有声音／小声)

別に棘なんてないでしょ。

あたしは普通に話してるだけ。

無自覚？

あたしが？

先輩、冗談言うの下手だね。

どうしたの？

まだ何か言いたそうな顔してる。

(位置12／有声音／小声)

いいよ、言って。

恋人には、隠し事なし。

うん…、うん…。

心が読めない？

あたしの？

そう？

目一杯、愛情表現してるつもりだけど。

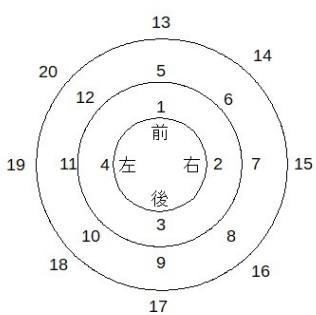
(位置12から4へ移動しながら／有声音／小声)

ほら…。

(位置7／有声音／小声)

(耳ふー一回) ふー…。

先輩はこれと、耳かきが好き。



付き合って一年も経つのに、分からない？
そうなんだ…。

あたしは先輩の事、色々分かる。

そう、顔に出やすい人だから。

(位置／有声音／小声)

あたしは分かりづらい…？

あー…、余り表情に出ないからかな？

(無感情で) じゃあさ、「いえーい、先輩大好き、えへへ。」とかやった方がいい？

でしょ？

これはこれで、あたしらしくない。

だからこのままでいいの。

さて、そろそろ着替えようかな。

流石にこのままじゃ風邪引いちゃう。

もう見納めだけど、もっと見ておかなくていいの？

ほら。

チラっ♪

ほらほら。

チラっ♪

もう、相変わらずの反応。

ホントにあたしの事、好きなの？

だって好きな子がバスタオル一枚で、目の前にいるんだよ？

それにさっきはあんなに興奮してたくせに。

裸よりも着てる方がいい？

嘘つかないで。

男性って女性の裸が好きなんですよ？

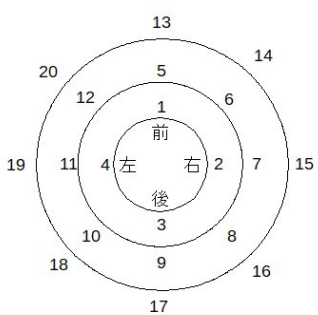
性癖…？

着てるのが？

ふーん、そうなんだ。

やっぱり先輩ってどこか変だよね。

まあそういう所も含めて、あたしは好きなんだけど。



えつと、じゃあ着替えてくる。

うん。

ちよつと待ってて。

2：夏海の部屋着（聴き手の部屋／昼過ぎ）

（ドアの開閉の音）

（夏海の足音）

（位置20／有声音）

ねえ先輩。

これ、見て。

（位置13／有声音）

新しい部屋着、買った。

モコモコのやつ。

それにこれ。

ウサ耳としっぽも付いてる。

ロップイヤー？って言うんだって。

そう、耳が垂れてるウサギ、いるでしょ。

あれ。

（位置13で一周ぐるりと回りながら／有声音）

どうかな？

似合ってる…、かな？

（位置13から位置1へ移動しながら／有声音）

そっか、可愛いかな…、よかった。

（位置1／有声音／小声）

これね、ピンクとホワイトの二種類あったんだけど、

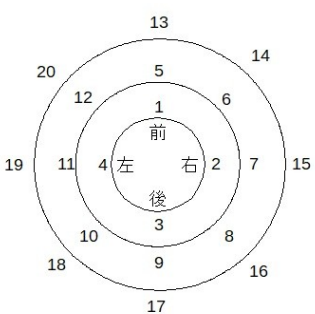
あたしがおうとした時にホワイトしかなくて。

それで仕方なくホワイトにしたんだけど。

先輩が可愛いって言うてくれたからいいや。

それにピンクって、あたしに似合わないかなとも思ってた。

ピンクも見てみたい…？



変じゃない…かな？

そう？

じゃあ今度はピンクで、他の可愛い部屋着、買ってみる。

それはそうと、何をさっきからニヤニヤしてるの？

可愛すぎて…、ヤバイ…？

あ、もしかして、これも性癖だった？

ふーん、じゃあ一杯見ていいよ。

(位置「から」へ移動しながら／有声音／小声)

ほら、耳もモコモコなの。

(位置「／有声音／小声」)

触ってみて。

ちよっと、何で頭撫でてるの。

そっちじゃなくて、耳。

あたしの耳じゃなくて、部屋着の方の耳。

先輩…、わざとやってるでしょ。

そう、そっち。

ね？

モコモコでしょ？

それに、このニーハイソックスもセットなの。

同じ生地だから、こっちもモコモコ。

ねえ、あたしの話、聞いてる？

あー、先輩のエッチ。

あたしの太ももに目線いつてる。

今はこの部屋着を見て欲しいの。

ねえってば。

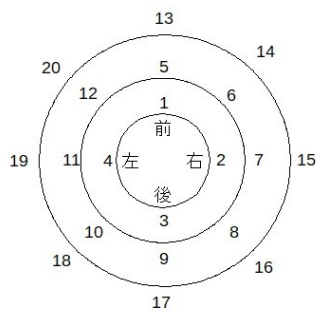
もう…、仕方ないなー。

どうしたいの？

まだお昼だけど…、したいなら…、いいよ…？

うん。

今日は特別。



(膝に寝転ぶ音)

(位置／有声音／かなり小声／ペースを乱さない様にゆっくり)

あのさ、先輩…。

何してんの？

膝枕って…、見れば分かるけど…。

そうじゃなくて。

エッチしたいんじゃないの？

それは後…？

じゃあ何するの？

耳かき？

何それ。

うん…、うん…。

モコモコ部屋着の耳かきが夢だなんて、先輩…、夢がちっさいね…。

まあいいけど。

でもさ、拍子抜けしちゃったな。

あたしだって先輩に、もっと求められたって思ってるんだもん。

それなのに…。

あたしってやっぱり魅力ないのかな…。

そんな事ない？

それホント？

ふむ…、まあそういう事しておく。

んじゃあ、耳かきしよっか。

あ、綿棒でもいいかな？

もう先輩が膝に乗っちゃってるからさ、耳かき棒を取りに行くの面倒。

綿棒ならここにある。

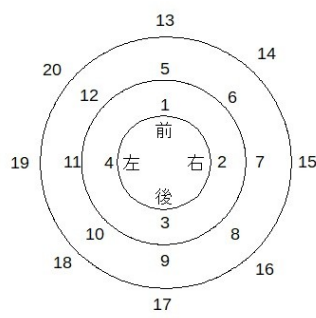
うん、分かった。

じゃあ綿棒で、お耳掃除する。

(綿棒を取り出す音)

やっていくから、動かないで。

ねえ先輩。



あたしってさ、ナツミって名前でしょ？

夏の海って書いてナツミなんだけど、この名前、あたしに合っていないっていつも思う。字面（じづら）からして、いかにもはつらつとして、

太陽みたいにキラキラしてそうじゃない？

でも実際のあたしはこんなで、丸つきり相反（あいはん）する名前だなーって。そう？

先輩はそう言うけど、あたしって普段からテンションこんなだし、

暑いのは苦手だし、夏と相性が悪いんだよね。

勿論、親には産んでくれて感謝してる。

けど、期待して夏海って名前を付けてくれたんだろぅなって考えると、

何だか申し訳ない気持ちになっちゃって…。

うん。

物心ついた時から、この名前がコンプレックスだった。

それにほら、あたしって兄貴が二人いるでしょ？

そのせいか女の子っぽい仕草とか、可愛いメイクとか全然分かんないし。

人の目を気にせず、ご飯はたくさん食べちゃうし。

地味で目立たないしで、何か惨めだなーって思ってるんだ。

でね、そんなだから、この部屋着は、結構勇気を出して買ったんだ。

あたしなんか可愛い服とか、合わないだろうなとは思ってた。

もし先輩に笑われちゃったらどうしようって、買う前も買ってからも不安だった。

でも可愛いって言うてくれて、凄く嬉しかった。

そう。

表情には出てなかったかもだけど、嬉しかった。

それにね？

こんなあたしを彼女にしてくれて、しかも凄く大切にしてくれるから、先輩の事、大好き。まあ？たまりに変な人って思う事はあるけど。

そう、たまりに。

そういう事にしといてあげる。

心外？

それ本気で言ってる？

誰がどう見ても、先輩は変な人だよ。

そう…。

変な人なのに…、こんなにも好きなの…、何か不思議…。

先輩って、あたしの兄貴とは全然違うタイプなんだ。

うん。

あたしの兄貴は二人とも不愛想で、人を寄せ付けないオーラが出てる。

でも先輩はその真逆。

いつもニコニコしてて、愛嬌があるから、人を寄せ付けるオーラが出てる。

オーラが見える訳じゃないけど、そういうの、あたし分かるから。

でね、そんなだから、少し心配もしてる。

先輩を誰かに取られちゃうんじゃないかって。

あたしみたいに魅力のない子、先輩と不釣り合いなんじゃないかって思っちゃう。

え？

そうでもない？

じゃあさ、どういう所に魅力を感じる？

スタイルいいのに大食いな所…？

それって魅力…なのかな…？

そうなんだ…。

他には？

いい匂いがする…？

先輩…、やっぱりキモいね。

しかもさ、膝枕してあげてから、何回か太ももの匂い嗅いでるでしょ。

分かるってば。

先輩の鼻で息を吸う感触が、何度もしてるもん。

もしかして、気付いてないとも思った？

まあもう慣れてるからいいんだけど。

それにしてもさ、そんなにあたしの匂いって、いい匂いなの？

へえ…。

さっきも言ったけど、恋人の匂いが好きっていうのは分かる。

でも、そんなに鼻息荒くして、嗅がせろって迫られると、やっぱり引く。

ねえ、聞いてる？

って、また匂い嗅いでるし。

全然聞いてないじゃん。

先輩は匂いフェチの変態野郎だね。

あのさ、もしかして、変態とか、キモいって言われて、喜んでない？

うーわ、図星なんだ。

うん、めちゃくちゃ引いた。

でも、あたしは先輩のそういう所も含めて好きなんだ。

そう。

こんなあたしを受け入れてくれるんだから、あたしも受け入れないと。

あ、でも、無理してる訳じゃないよ？

ホントに嫌な事は、ハッキリ嫌って言うから。

そう。

さっきもそうだったでしょ？

汗臭いのを嗅がれるのは、流石に嫌。

本気で嫌だったから、ちよつと強く言っちゃったね。

気にしてる？

そっか、よかった。

あたしもちよつと言い過ぎたかなって、気になってた。

もし先輩を傷付けちゃってたらどうしようって、少し不安だったんだ。

でも、気にしてないならよかった。

よし。

綺麗になったから、お耳にふーってするね。

綿棒だから梵天がないけど、まあ仕方ないよね。

(耳ふー二回) ふー…、ふー…。

(耳ふー短く二回) ふっ…、ふっ…。

(耳ふー長く一回) ふー…。

うん、綺麗になった。

今度は反対。

ゴロンして。

(寝返りの音)

(位置)／有声音／かなり小声／ペースを乱さない様にゆっくり)

こっちも綺麗にしていく。

そう言えばさ、先輩。

内定もらえてよかったね。

去年から就活してきて、希望する会社に採用されるって凄い。

あたしも来年から始めなきゃいけないんだけど、不安。

一番の難関は面接。

今からでもニコッと笑う練習しとかなきゃ。

そう。

あたし、表情筋が絶望的に衰えてると思うから、鍛えるの。

それで、少しでも好印象を持ってもらえるようにしておかないと。

うーん、確かに大事ななのは中身だけど、数分の面接で中身まで分からないじゃない？

そうだよ。

結局さ、面接なんてものは第一印象が一番大事。

面接官だって、何人もの自己紹介を聞いて、そのうち飽きちゃうだろうから、尚更。

とは言っても、正直いい印象を残せる気がしないから、

先輩、後でちょっと練習に付き合ってよ。

うん、笑顔の練習。

そうは言っても、あたしには必要なの。

まあ先輩みたいに、いつもニコニコ爽やか青年は、気にした事がないかもだけどね。

どうしても意識して笑顔を作ると、引きつった顔になっちゃうんだ。

だからね、少しでも自然な笑顔になるようにって、実は既に隠れて練習してるの。

そう。

だから後で見て。

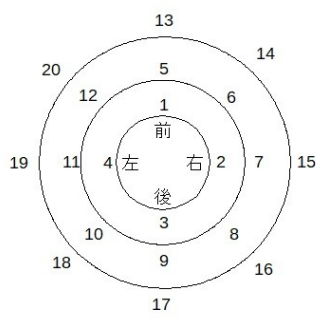
あ、あたしの顔を見て笑ったら許さないから。

もし笑ったら…？

そっだなー。

先輩の事を嫌いになるかも。

え…、あ…、嘘、嘘だって…。



そんな顔しないで。

えっと、じゃあ…、ちょっと嫌いになるかも？
分かんないや。

元々あたし、笑顔に自信ないから、もし笑われても何とも思わないかも。
ねえ先輩。

笑顔が下手な子は嫌い？

もし嫌いだったら、もっと頑張って可愛い笑顔を見せられるようにする。
そう？

そっか…。

自然なあたしが好き…、か…。

あたし、やっぱり先輩の事、大好き。

こんなにも大事にしてくれて、こんなあたしを好きって言ってくれて、幸せ…。
じゃあさ、あたしも先輩の好きな所、言うね。

いつも優しい所。

いつも爽やかな所。

いつもいい匂いな所。

実は先輩の匂い、好きなんだ。

それと、あたしを大切に思ってくれてる所。

後は…、時々…、変な所…？

うーん…、変って、嫌って意味じゃなくて、面白いって意味。

そう、褒めてる。

他には…、あ、年上って感じがしない所も親しみやすい。

うん、褒めてるよ？

何でさ。

バカにされてる気がする？

あー、ごめん。

言い方が悪かったかな？

あたしがもっと上手く表現出来たらよかったんだけど、ちゃんと褒めてるつもり。
そう。

先輩にはいい所がたくさんある。

だから大好き。

うん、キモい所も含めて。

だから、何で唇尖がらせてるの？

いい意味って言ったでしょ。

キモいって言葉が悪いのかな？

うーん…、じゃあ、キモかわいい…？

違う？

えーっと…、おにくニンニク君みたい…？

あ、知らない？

大きな目に、大きな口で、全身がホワイトとピンクの正義の味方。

今、一部の女の子に人気なの。

そっか…、知らないか…。

えーっと…、じゃあー…、あ、そうだ。

今やってる映画。

ほら、あの話題のやつ。

あれに出てくる敵役…、って感じ？

えー、これも違うの？

じゃあ分かんないや。

とにかく、あたしは先輩の事が好きって事には変わらないから。

例えるのが下手でごめん。

ホント？

伝わった？

そっか、よかった…。

あたしね…、先輩と出会う前は、毎日が憂鬱だった。

周りの子はキラキラしてて、同じ年齢で、同じ学生なのに、

どうしてこんなにも、あたしと違うんだろう、っていつも思ってた。

でね…、ああ、あたしはこれまでも、これからも、

ずっとこういう地味な人生なんだろうなって、捻くれてた。

でも違った。

あの日、学食でふざけてた男の子がお盆をひっくり返しちゃって、

あたしに水がかかったの、覚えてる？
そう。

あの時、真っ先に駆けつけてくれたのが先輩だった。
それで、あたしのために怒ってくれたでしょ？

何だかよく分からないけど、兄貴とは違う、頼もしい感じがした。
で、その時ね、人生が変わる音が聞こえたの。

運命の鐘ってやつかな？

上手く言い表せないけど、そんな感じ。

その後に先輩、風邪引くぞって上着を貸してくれて、その時にフワッと香った匂い…。
あれでもう駄目だった…。

そう、それは恋。

でも先輩ったら、名乗りもせず、じゃあって残して行っちゃって。
上着を返したくても返せなくて。

それで学食にまた来るかなって思って、毎日学食で待ってた。

あたしの予想通りだった。

ニコニコしながら向こうから歩いてくる先輩を見つけた。

で、いざ上着を返そうとしたら緊張しちゃって。

ああ、どうしよう、もう目の前だって思ってたら、先輩から声をかけてくれた。
この前の子だよな？って。

正直、飛び上がる程嬉しかった。

だって、あたしみたいな子、影が薄いし、人の記憶に残らないだろうから。
で、声をかけられたのはいいけど、舞い上がっちゃって。

それで無言で上着だけ突き付けて、走って逃げちゃったんだよね。

あ、そろそろこっちも、お耳にふーってしていくね。

(耳ふー二回) ふー…、ふー…。

(耳ふー短く二回) ふっ…、ふっ…。

(耳ふー長く一回) ふー…。

綺麗になった。

うん、起き上がってもいいよ。

(起き上がる音)

(位置／有声音／かなり小声／ペースを乱さない様にゆくり)

さっきの続きね。

あれは…、確か…、あたしが逃げちゃった次の日だったつけ。

今度は先輩が待っていてくれて、あたしに声をかけてくれた。

あたし、その時ビックリしちゃって、変な声が出そうだった。

あたしに声をかけてくるだなんて、普段あり得ないもん。

顔を上げたら、その時もニコニコしてこっちを見てる先輩が居た。

途端にドキドキしちゃって、何を話していいか分からなくて。

咄嗟に出た言葉が、変な人…、だった。

今思えば、第一声が変わる人って、凄く失礼。

でもその時は、何にも考えてなかったから、思わず言っちゃった。

そうしたら先輩、そっか、俺は変な人かってニコニコしてた。

そう…、怒る訳でもなく、ニコニコしてた。

しまったって思った時にはもう遅かった。

変な人って言っちゃったから、何とか誤解を解かなきゃって思った。

けど次の言葉が出てこなくて、凄く焦っちゃったんだよね。

それを察したのか分からないけど、先輩の方から、

一緒にお昼食べようって言われた時は、冗談かと思った。

で、一緒にお昼ご飯を食べて、話してる内に、更に驚いた。

先輩、前からあたしの事が気になってたって聞いて、嘘が下手だなんて。

でもそれは本当で、水を被っちゃったあの時も、偶然近くに居たんじゃなくて、

実はあたしの近くでいつもお昼を食べてた。

今になって考えれば、先輩らしいと言えらしい。

一歩間違ったらストーカーだけど…。

まあでもその時は、気になってたって言われた瞬間、考えるのをやめちゃってた。

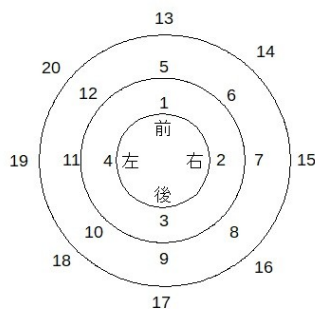
それから何回かお昼を一緒に過ごして、お夕飯も行くようになって、

ある日の夜、告白してくれた。

ハッキリと、好きだって…。

あたしは一目惚れだったから、断る理由なんてなくて。

嬉しくて、幸せで、気付いたら泣いてた。



涙でくしゃくしゃの顔で、あたしも好きですって、振り絞って…。

その時、いつもニコニコしてる先輩が、ちよつと安堵したような顔になったの、覚えてる。ねえ、あの時、何を思ってたの？

うん…、うん…。

え、初めての告白だったって、それホント？

以外。

だって先輩モテそうだし。

今まで女の子とかにデート誘われたりしなかった？

へー、全部断ってたんだ。

何で？

ふーん、自分から好きになった人とじゃないと嫌…、か…。

先輩ってさ、思ってたよりも初心（うぶ）なんだね。

えー、だってそうじゃん。

そういう事に関しては、すぐ慣れてそうに見える。

まああたしが言えた立場じゃないけど。

そっかー、先輩が初めて告白したのがあたしかー。

何（なん）か貴重な初めてを、色々と奪っちゃっていいのかな…。

そっか、あたしにならない…、か…。

先輩はズルい…。

普段は変な人で、キモいのに、こういう時はキッチリ真面目に返してくるんだもん。

そんなの…、もっと好きになる…。

じゃあ、もっと好きになったお返しに、もう一つ夢を叶えてあげる。

そう。

今日は大盤振舞。

ちよつと飲み物を取ってくるから、その間に考えておいて。

うん。

じゃあ行ってくる。

（夏海が立ち去る足音）

3…夏海の耳遊び（聴き手の部屋／夕方）

（位置二／有声音／小声）

ただいま。

（ペットボトルを開ける音）

（水を飲む演技） んっ…、 んっ…、 んっ…。

ふう…。

あたしにしては結構喋ったから、喉渴いてた。

もしかしたら、人生で一番喋ったかも。

そう。

多分ギネスに載る。

まあそれは冗談。

え？

うん、生き返った。

先輩も飲む？

はい、これ。

飲みかけだけど。

もうこれ一本しか残ってないから我慢して。

って、躊躇う事なく飲んだ。

まあ間接キスくらいで慌てるような先輩じゃないか。

ううん、いいの。

気にしないで。

そうだ。

（位置二から五へ移動しながら／有声音／小声）

もう一つの叶えたい夢、何？

（位置五／有声音／小声）

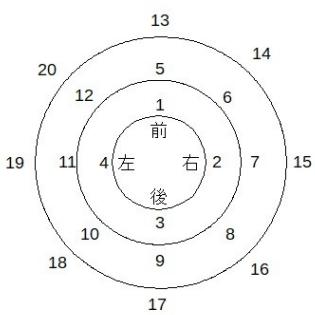
何でも聞いてあげる。

いい、言うて。

え…？

お耳のマッサージ…？

えーっと…、そんな事でいいの…？



いや、さっきはエッチを後回しにって言ったから、てつきり今度こそ…と思ってた。
そっか…、エッチじゃないんだ…。

あたしって、やっぱり魅力ないのかな？

だって…、勇気を出してこの部屋着を買って、アピールしてる。

可愛いって言うてくれたけど、やっぱりあたしだってもっと求められたい。

ああでも、確かに効果はあった。

先輩、いつもよりあたしの事、エッチな目で見てる。

それなのに求めてこないのは、あたしに魅力がないから…？

うん…、うん…、そっか。

エッチは一方的に望んでする事じゃない…、か…。

急に真面目じゃん。

うん、意外。

まあ言ってる事は分かる。

あたしも同意。

それにエッチが叶えたい夢っていうのも、少し違う気がしてきた。

で、本当にお耳のマッサージでいいの？

分かった。

あーでも…、普通にマッサージするだけじゃつまんない。

でしょ？

だから、色んなものを試してみたい。

別に興味本位な訳じゃない。

そう、これは先輩とのコミュニケーションの幅を広げるための、所謂スキンシップ。

うん、そういう事。

じゃあ…、最初はこのメイク用の、ふわふわのブラシからね。

身構えなくても大丈夫。

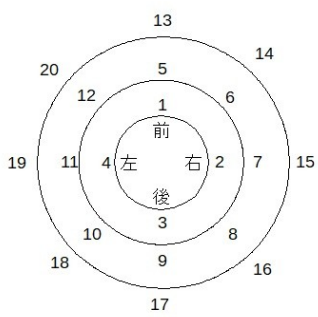
多分くすぐったいだけだから。

ほら、ジッとしてて。

(ブラシで耳を撫でる音)

(位置〽有声音／かなり小声)

ふわ…。



ふわー…。

先輩ってさ、お耳弱いよね。

だってこの前、ふっ…って耳に息がかかっただけでビクッとしたの、見逃さなかった。そう。

だから、そのためのブラシ。

もつとやる。

(位置2から4へ移動しながら／有声音／かなり小声)

反対のお耳もやる。

ふわー…。

(位置4から2へ移動しながら／有声音／かなり小声)

あ、こっちのお耳の方が反応が大きい。

さては先輩、こっちのお耳が弱点だね。

先輩の弱み、一つ握った。

これは大きな収穫。

え？

ああ、大丈夫。

今は何もしないから。

今は…、ね。

(位置4から2へ移動しながら／有声音／かなり小声)

もう一回反対側する。

(位置2／有声音／かなり小声)

ふわー…、ふわー…。

ふわー…、ふわー…。

こしょ…、こしょ…。

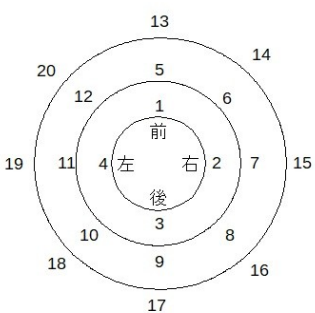
こしょ…、こしょ…。

(位置2から4へ移動しながら／有声音／かなり小声)

もう一回こっちも。

(位置4／有声音／かなり小声)

ふわー…、ふわー…。



ふわー…、ふわー…。

こしょ…、こしょ…。

こしょ…、こしょ…つと…。

うん、満足した。

え？

先輩が身悶えてるのを見て、満足したの。

いいじゃん、別に。

知らないい。

次ね、次。

(位置[△]から^一へ移動しながら／有声音／かなり小声)

次は…、これでやってみようか？

(位置^一／有声音／かなり小声)

これはね、柔らかいシリコン製で、顔を洗う時に使うブラシ。

二個セットだったから、丁度いい。

じゃあやっていく。

(シリコンブラシで撫でる音)

どう？

痛くない？

そっか…。

やっぱりシリコン製ってだけあって、肌を傷付けない。

凄い。

じゃあ続ける。

このさ、ポコッ…、ポコッ…、ていう、何とも言えない音が心地いい。

何となく、海に潜ってる感じがする。

あたしはそう思うんだけど。

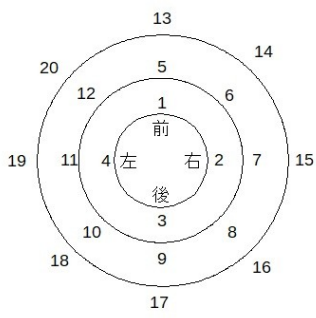
先輩さ、目を瞑ってみて。

そうしたら、あたしの言ってる意味が分かるかも。

想像してみて。

青く煌めく、どこまでも透明な海…。

足元には…、魚たちが悠々と泳いでる。



見上げると、海面がキラキラ輝いてる。

遠くの海面には、大きな客船。

どう？

少しは海って感じしてきた？

そっか、よかった。

ねえ先輩。

あたしさ、いつか海に潜ってみたい。

夏海って名前なのに、海に入った事がない。

だから、真っ青な海に潜ってみたい。

実際に肌で、目で、耳で感じたら、少しはあたしも変われるかも。

あー、無理に変わりたいっていうのじゃなくて、心を入れ替える…、みたいな？
そう。

人って経験したり、時間が経ったりすると、変わっていく生き物だから。

いつかあたしも、自分の名前を誇れるようにになりたい。

だからさ、いつか海に行こ？

うん、約束。

今は実際に海に行かないと経験できないけど、近い将来は海に行かなくても、

バーチャルの世界で海に潜る…、何て事が出来る様になるかも。

先輩が内定もらった会社って、そういう物を企画立案する会社でしょ？

今はゲームとか、テレビの映像とかでしか見れない海。

いつか気軽に体験できる様になったら嬉しい。

うん、期待してる。

シリコンブラシ、終わり。

さて、次は…。

お待ちかね、炭酸マッサージ。

先輩、これをして欲しかったんでしょ。

いいの。

言わなくても分かってる。

だって、目がキラキラしてる。

先輩は分かりやすい。

じゃあやっていくから、膝に寝転がってくれる？
そう。

座ったままだとやりづらい。

(膝に寝転がる音)

うん、それでいい。

じゃあ、あたしの炭酸化粧水で、マッサージしていく。

って言うか、ほぼ先輩のお耳マッサージ専用になってるけど。

ああ、気にしないで。

最近お手頃価格のを見つけた。

これ、近くのドラッグストアで売ってた。

前はあんまり売ってなくて、通販で買ってたよね。

結構いいお値段してた。

まあ、先輩が気持ちいいって言ってくれるから、細かい事は気にしない。

(位置～有声音／かなり小声)

(炭酸化粧水を手に取る音)

じゃあ、しゅわしゅわっとしていく。

うん、いい音。

まずはこっちのお耳から…。

音だけじゃなくて、パチパチって炭酸の刺激が気持ちいい。

しゅわ…、しゅわ…。

しゅわ…、しゅわ…。

パチ…、パチ…。

パチ…、パチ…。

これ、あたしの手もパチパチして気持ちいい。

うん、好き。

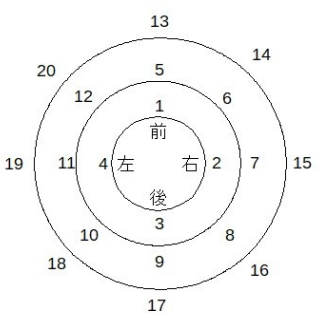
あ、そうだ。

今度、あたしにもお耳のマッサージして欲しい。

自分でやるのはやだ。

先輩にやって欲しい。

たまにはいいじゃん。



今日は先輩の夢を叶えてあげるって言ったから、また今度で。

約束して。

あたしだって先輩ともっと触れ合いたい。

今まで言わなかったけど…、先輩はもっとあたしを甘やかすべき。

駄目…、全然足りない。

今もこうして触れ合ってるけど、それじゃ足りない。

そう。

だから約束して。

うん、楽しみ。

(位置²から⁴へ移動しながら／有声音／かなり小声)

もう一回、今度は反対のお耳。

(位置⁷／有声音／かなり小声)

(炭酸化粧水を手に取る音)

こっちも。

ねえ先輩。

約束したからにはやってもらう。

そう、お耳のマッサージ。

いつやってくれる？

決めておかないと、先輩、はぐらかしそう。

やっぱり、その気だったでしょ。

お耳マッサージくらい、してくれてもいいじゃん。

あたしばかりやってあげてて、先輩だけズルい。

約束は破ったら駄目なの。

そう、大事。

で、いつやってくれる？

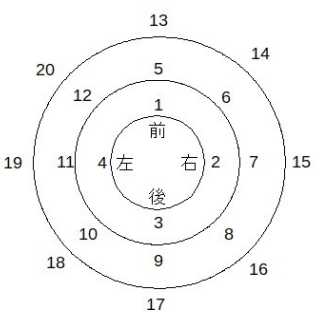
あたしが決めていいの？

じゃあ…、明日。

決めていいって言ったの、先輩。

早くやって欲しいから、明日。

何も問題ない。



それとも何か都合悪い？

じゃあ、明日ね。

決まり。

楽しみ。

じゃあ明日は、ランニングはお休み。

楽しみだから、それどころじゃない。

だからお休み。

いいの。

こっちもお耳マッサージ終わり。

(位置[△]から[→]へ移動しながら／有声音／かなり小声)

今度は両耳同時にやる。

(位置[→]／有声音／かなり小声)

(炭酸化粧水を手取る音)

しゅわ…、しゅわ…。

しゅわ…、しゅわ…。

パチ…、パチ…。

パチ…、パチ…。

これさ、泡の音も最初の方と、最後の方で聴こえ方が違うのも面白い。

最初の方は、しゅわしゅわって音。

最後の方は、パチパチって音。

あたしはどっちも好き。

先輩は？

そっか、先輩も一緒だ。

嬉しい。

好きな事が一緒って、嬉しいじゃん。

でしょ？

最後にもう一回やる？

いいよ。

(炭酸化粧水を手取る音)

しゅわ…、しゅわ…。

しゅわ…、しゅわ…。

パチ…、パチ…。

パチ…、パチ…。

ねえ先輩。

先輩は匂いフェチ…、だよね。

ふーん…。

あ、違う。

嫌って意味の相槌じゃない。

確かにたまーにキモいと思う事はある。

そう、たまーに。

けど、先輩が好きな事を否定はしたくない。

うん、だから平気。

でもさ、あたしも嫌な時は嫌って言うって、さっき伝えたでしょ？
だから言う。

飲み物を取りに行った時、ついでに洗濯もしちゃおうと思った。

その時、ある事に気付いた。

先輩、この意味、分かるよね？

黙ってても無駄。

多分犯行に及んだのは、あたしがこの部屋着に着替えてる間。

容疑者は先輩しかいない。

まだとぼけるつもり？

そう、ならハッキリ言う。

あたしのランニングウェア、どこ？

持って行ったの先輩しかいない。

ねえ、どこ？

ベッドの中…？

もう…、お布団に汗が染みちゃうじゃん…。

本当に変態…。

キモい…。

でも…、大好きだから、許してあげる。